

天下分目の姫路城

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦が起きました。この結果、池田輝政が播磨国を与えられました。播磨国主となった池田氏は、姫路城の大改修を行ったことは周知のとおりです。しかし、池田氏の播磨入封以前、とくに羽柴秀吉が大坂へ移ったあとの姫路はどうだったのでしょうか。何か史料はないものだろうかと思っていたところ、関ヶ原合戦前後の記録に姫路を記す史料がありました。姫路城下を具体的に示すものではありませんが、いくつか紹介しておきます。

次の史料は関ヶ原合戦直前の慶長5年7月21日に、松井康之にあてた細川忠興の書状にある文言です。

- (前略)如水とかねて申合てをき候、此状八丹後ヨリひめち辺へ遣、舟にて届候へと申付候、
- 一 内府八江戸を今日廿一御立候由候、我等八昨日うつの宮まで越在之事候、さためてひつくり返し上方へ御はたらきたるへきと存候、

徳川家康はこの日会津討伐に向かうため江戸を出立し、細川忠興は前日までに宇都宮に入ったようです。上方における石田三成の動きは予想通りだったのでしょうか、上方へ引き返すことはおり込みずみだったようです。とはいえ、本隊を連れて従軍中の忠興としては留守にしている国元の状況が心配になります。この文言の前文では有事における具体策を指示しています。即ち、丹後では宮津に集結すること、豊後では木付(杵築)にあつて状況を見計らって黒田如水の城に入るよう指示し、その点に関する事前の黒田との申し合わせはすでにできていたようです。ここで補足しておく、関ヶ原合戦直前、細川氏は丹後国のほかに豊後国速見郡にも所領がありました。豊後領では家臣の松井康之が木付城に拠って固めており、中津城の黒田官兵衛とは共同戦線を張ろうという意図がみえます。

次は同年8月18日付松井康之の書状の一部です。

- 一 如水先書二如申入、女房衆甲州御内儀迄盗出、一途二内府様御味方にて御座候、当城へ万事御心付にて御座候事
- 一 主計殿、是又同前二て御座候、当城へ兵糧・玉薬御入候て御懇共候事
- 一 右御両人之外八、皆敵ニテ御座候、併内府様御上之うへ八、何も草のなひきたるへく候事、

なるほど豊後の諸大名は西軍派と日和見が多く、豊前の黒田と肥後の加藤の協力が不可欠だったことがわかります。実際、戦端が開かれると、緒戦で父・幽斎の籠る田辺城が西軍に包囲され、豊後では黒田勢の活躍で大友義統を石垣原合戦に破りました。

ところで上記の史料をみて気づくのは、「此状八丹後ヨリひめち辺へ遣、舟にて届候へと申付候」とあるように、丹後から豊後へ姫路経由で書状が船で送られていることです。8月18日付松井康之書状の冒頭にも「去二日、幡磨へ傳へ捧愚札候」とあるので、姫路を中継して丹後・豊後間のやりとりが行われていたことは間違いありません。これは、延俊が忠興の義兄弟であったことに大きく関係していたはずですが。ちなみに延俊は、忠興を通じて家康に東軍へ加担することを約束しています(『木下延俊慶長日記』新人物往来社、1990)。

さて、関ヶ原合戦の形勢を決定的にしたのは小早川秀秋による「裏切り」とも言われます。本来毛利軍が布陣するはずの松尾山城に強行進駐し、そこから大谷吉継勢の側面を強襲したことで、西軍は総崩れになりました。しかしもともと秀秋はこの会戦に参戦する意思は薄かったようです。

もし上方にをいて逆心の者あらば秀秋よろしく忠節をつくすべし、其時にあたりて兵を原野に出さば、功をなす事あたはじ、播磨国姫路城は秀秋が兄木下右衛門大夫延俊が守れるところなり、ねがはくはこの城をかりて居城とし兵略をほどこさんとこふ。東照宮これをゆるしたまふ。よりに申通ずといへども、延俊あへてうけがはず。つゝに秀秋と交りをたつ(『寛政重修諸家譜』第六百八)。

秀秋としては姫路城を居城とし、上方の情勢を窺っていた様子です。それを家康が承認したにもかかわらず、姫路城代であった木下延俊(秀秋の実兄)に入城を拒絶されたというのです。木下一族は北政所を核として当初から東軍への加担を既定路線として結束していたといわれます(『ねねと木下家文書』山陽新聞社、1982)。しかし一方で、石田三成は秀秋に豊臣秀頼が成人するまでの「天下の委附(=関白)」と筑前・筑後のほかに播磨の加増を約したともいいます。当時姫路城は播磨国内の豊臣蔵入地の管理を担っていたとみられるので、秀秋の姫路入城は、西軍勝利以後を想定したものとも見做せます。延俊の拒絶は、こうした情報を察知していたからかもしれませんが、それにしても、兄からそんな仕打ちをされた弟の精神的ダメージは小さくはなかったような気がします。

その一方で、東軍勝利の場合でも「上方にをいて逆心の者あらば秀秋よろしく忠節をつく」して「居城とし兵略をほどこ」したことにしておけば問題ないとする打算があったのかもしれませんが。

こうしてみると、東西どちらに転んでも小早川家が立ち振る舞えるようになっていたようにも思えます。ところが、肝心の姫路入城がかなわなかったため予定が大きく狂ってきたようで、その結果、関ヶ原合戦での「裏切り」につながっていったのでしょうか。

憶測を述べてきましたが、そのついでに。もしも、秀秋が姫路入城を果たしていたら、関ヶ原合戦はどうなっていたのでしょうか。

松尾山城には予定通り毛利輝元が入城。輝元本隊に連動して毛利秀元隊が南宮山を駆け降りて山麓に布陣する池田・浅野隊をなぎ倒す。勢いづいた秀元隊は、山内隊を蹴散らして東海道を西上し家康本陣の背後を突く！晴れて関白となった秀秋は姫路にあつて秀頼を後見。姫路城は関白の城となった。

あくまでシュミレーションの話です。

[参考文献；『関ヶ原合戦と九州の武将たち』八代市立博物館、1998]

